

フィギュアスケートのかわいい後輩たちの結果に翻弄されつつ、トリノの冬が終わった。個人的には、モーグルの上村選手のレース後の涙が、心の奥を揺さぶった。彼女の生い立ちと、長野から始まった五輪への挑戦を思うと、悲しみでも悔しさでもなく、かといって清清しく満足感に満ちたともいえない涙に、「生きてあること」のむずかしさや複雑さを感じた。

さて、ようやくではあるが、基金訓練(雇用保険の受給資格を持たない人々への職業訓練)で初めてとなる「社会的事業者コース」が、京都府で2コース確定した。認定基準が示されて以降、雇用能力の各県窓口などに振り回されながら、やっと新しい「仕事おこしのための職業訓練」の時代が幕を開ける。全国でこの社会的事業者コースに名乗りを上げるべく、昨年秋から推進会議を開催してきた。連休以降、全国で一気にワーカーズコープづくりの職業訓練が始まっていく。この内容も、食・農・環境や、予防重視型ケア、子育てなど多様であり、複業的である。また、地域や集落機能を支えるような仕事も想定されている。職業訓練と仕事おこしと食農環境分野の×3の実践は、個人的にはここ5年間の若者支援への関わりから実感し構想してきた、一つの集大成的取組みである。この未知の挑戦は、未開拓の研究分野を提供し、協同総研の研

究活動にも新しい挑戦の機会を提供するだろう。

懸案の法制化は、予想通り山あり谷ありの最終局面だ。役員会は開かれたものの、検討すべき要綱についての最終調整段階である。政治との付き合いで感じてきた印象は、今も不変だ。一方で、失業や無業に苦しみながら必死で前を見つめようとする人々があり、一方では「誰のため、何のため」かを、もてあそび、つまらないプライドで他人の未来をも塞ぐ人々。協同労働の法制化は、実は政治改革のプロローグとして、政治家たちに「協同」や「連帯」という人の「心」を突きつけているのかもしれない。政治は誰のため、何のためのものか。その思いから、「政治と金」問題も「普天間」問題もやり直すしかない。

ひな祭り・桃の節句に向けて人形を出した。この祭りは厄払い。自らに災厄を人形に託し、魔除け効果のある桃の花を飾るのだとか。しかし、災いや困難がなくなることはない。オシム前サッカー日本代表監督は、毎日どんな練習をやるかわからない環境に選手をおき続けたらしい。いつ何が起ころうと、何をどうやったらよいかを考えるために。戦地を生き抜いた氏の哲学が垣間見える。混乱を起こし、その中で主体性が磨かれる。法制化の最終局面も、我々の主体性が問われるのだらう。